

保育者志望短期大学生のメンタルヘルスに関する探索的研究(2)

—UPI (学生精神健康調査) と短大生活不適応感および

保育者効力感との関連—

橋本 翼

An Exploratory Study of Mental Health of Junior College Students Majoring in Early Childhood Care and Education (2)

— University Personality Inventory, Junior College Life
Maladjustment, and Pre-School Teacher Efficacy —

Tsubasa Hashimoto

Abstract

The purpose of this study is to investigate the mental health of junior college students majoring in early child care and education. In this study, three questionnaires were administered : University Personality Inventory-GR Short Version (UPI-GRSV), Junior College Life Maladjustment (JCLM), and Pre-School Teacher Efficacy (PSTE). One hundred and twenty eight students participated in this survey and all results were analyzed. The main results were as follows: (1) UPI-GRSV showed positive correlation with JCLM and showed negative correlation with PSTE. In addition, JCLM showed negative correlation with PSTE. (2) Exploratory factor analysis was performed on JCLM and revealed four factors: declining motivation to be a preschool teacher, declining motivation to study in Junior college, declining sense of belonging to the community, and difficulty achieving lessons and tasks. (3) Compared with the low score group, the high score group of UPI-GRSV showed significantly higher scores on all factor scores of JCLM. Finally, the author suggests that the use of these scales can quickly identify students requiring support and lead them to appropriate support. Sophistication of student support system is required for our junior college.

Key words: mental health of junior college students majoring in early childhood care and education, UPI, Junior College Life Maladjustment, Pre-School Teacher efficacy

問題と目的

2014年度より著者は共同研究者(垂見)と共に、本学の保育者志望学生のメンタルヘルスの状態について調査を行ってきた。2014年度の調査(橋本・垂見, 2014)においては、保育者志望短期大学生のメンタルヘルスが悪化の傾向にあること、学生は多様な質の悩みを有していることが示された。2015年度の調査(橋本・垂見, 2015)においては、保育者志望短期大学生のメンタルヘルスを自尊感情との関連から調査し、UPI 短縮版得点の継時的変化を同時に調査した。その結果、UPI 短縮版得点の継時的な変化は認められないこと、自尊感情が低い学生ほどUPI 短縮版得点が高いことが示された。また自尊感情とUPI 短縮版得点の間には有意な負の相関が認められた。自尊感情は学生の精神的健康と一定の関連性が認められるものの、自尊感情の低さが学生の学校不適応に関連する中途退学を予見するための指標と判断することは困難であることが明らかになった。

本学において喫緊の課題となっている点は、中途退学者の増加に対する予防的対応策である。毎年4月に新入生対象に行っているUPI 短縮版は、学生のメンタルヘルスの状態を把握する点で一定の成果を挙げているものの、退学者の多くはUPI 短縮版の得点が低く、一見悩みを抱えていないように見えて、ある日突然学校に来なくなるか、退学の意思を伝えてくる。元来UPIは他の心理検査とバッテリーを組むことで学生の多様な状態像を把握することが可能な質問紙である。小田(2015)は、2014年度の学生相談に関わる研究をレビューした論文の中で、UPIのスクリーニングテストとしての位置づけに疑義を呈しており、UPIに代わる大学生対象のスクリーニングテストの開発が望まれると述べている。以上のことから、今回保育者養成校短期大学である本学の学生の、学校不適応感を測定するための尺度の開発を行うことが、UPIでは捉えきれない学生の心理的不適応感を把握し、早期の援助につながっていくものと思われる。

いっぽう、近年保育者の保育能力を測定するための概念として、「保育者効力感」の研究が盛んに行われている。「保育者効力感」とは、三木・桜井(1998)によると、「保育場面において、子どもの発達に望ましい変化をもたらすことができるであろう保育的行為をとることができる信念」と定義されている。三木・桜井(1998)は15項目からなる「保育者効力感尺度」を開発し、保育系短大生に対して実習(保育園および幼稚園実習)の前後の保育者効力感の変化を調べている。その結果、実習経験が学生の保育者効力感の向上に影響を与えてい

ることが示された。神谷(2009)は実習時期と実習内容に着目し、保育者養成短大生の保育者効力感の継時的な変化を、学生の進路選択パターンとの関連から分析している。その結果、学生の保育者効力感は初めての保育所実習を経験した後の1年次1月時(2回目の測定時)が最も高く、その後卒業前の2年時2月(4回目の測定時)にかけて低くなっていくことが示された。また、進路選択パターンとの関連では、2年次秋において就職活動をせず情報収集もしていない学生が、一貫して保育者効力感が低くなっていた。本学においても学生の保育者効力感を把握しておくことは、学校適応の面からも、キャリア教育の面からも重要なことと思われる。また、保育者効力感が低い学生は保育者養成校の授業や学校生活自体に意欲をなくしていき、容易に中退等の選択を行うことも想定できる。そこで今回は、学生の保育者効力感の測定も行うこととする。

・本研究の目的は以下の3点である。

- (1) 学生のメンタルヘルスの状態を把握するために用いていた従来のUPI短縮版をより臨床的に活用可能なものに修正する。
- (2) 学生の学校不適応感を測定する尺度を開発し、UPI短縮版との関連を調べる。
- (3) 学生のメンタルヘルスの状態と、保育者効力感との関連について調べる。

方法

1. 調査の概要

・調査対象

近畿大学九州短期大学保育科1年生および2年生

・調査時期

平成28年9月下旬に実施した。1年生は「教育心理学」の授業内で質問紙を配布し、紙面と口頭で調査協力の依頼を行った。同意が得られた学生にその場で回答を求め、回収した。2年生に関しては、保育科教員に質問紙調査の概要を説明し、担当授業内での配布及び回答を依頼し、実施および回収を行った。なお回答中に著者が講義教室を訪れ、学生に調査協力依頼と説明を口頭で行った。

・調査内容

質問紙は以下の内容で構成されている。（（２）のみ巻末に資料として掲載した。）

（１） ５件法版 University Personality Inventory 短縮版（UPI-GRSV）

UPIは多くの大学で新入生対象に行われているものの、信頼性および妥当性の面で検証が不十分であるとの指摘がされている(例えば吉村,1998)。酒井(2015)はUPIの５件法版であるUPI-GRを作成し、その妥当性を検証している。本学ではUPIの短縮版であるUPI-SVを使用しているが、それぞれの症状に対して「はい」「いいえ」２件法で回答を求めるがゆえ、臨床的な使いにくさと援助が必要な学生を十分に把握できない印象を著者は抱いていた。そこで平成28年度4月時に、酒井(2015)の研究を参考にし、UPI短縮版の回答を５件法に修正した５件法版UPI短縮版(UPI-GRSV)を作成し、新1年生および2年生に実施した。本調査でも、同じくUPI-GRSVを使用した。UPI-GRSV全30項目は、「精神身体的訴え」（「不眠がちである」等）、「抑うつ傾向」（「将来のことを心配しすぎる」等）、「対人不安」（「人に頼りすぎる」等）、「強迫傾向、被害関係念慮」（「汚れが気になって困る」等）の4つに分類される。回答は、それぞれの質問に対し、「ここ半年で」どの程度経験したかを、「いつも」、「たいてい」、「ときどき」、「少しだけ」、「全くない」の５件法で尋ねた。

（２） 短大生活不適応感尺度(JCLM)

本研究では、保育者養成校短期大学に在籍する学生の学校不適応感を把握するための尺度を作成し、「短大生活不適応感尺度(JCLM)」と命名した。項目の選定に関しては、橋本・垂見(2014)の研究で明らかになった、学生の悩みの質に関する項目を参考にし、学生が保育者養成校短大での学校生活に不適応感を感じるであろう場面を①学習面の困難さ(例えば「授業の内容が難しく、理解できないことが多い」等)、②人間関係の困難さ(例えば「クラスの中で誰と一緒にいてよいか分からない」等)、③保育者志望意識の低下(例えば、「将来保育士になる気はない」等)④就学継続意識の低下の(例えば、「学校をやめたい」等)、の4つの観点から尺度を構成した。なお、尺度の内容に関しては、保育科の教員1名に本尺度の内容を提案し、本学学生の学校不適応感を把握するに足ると判断された20項目を採択した。各項目に関する回答は、「とてもよくあてはまる」、「かなりあてはまる」、「あてはまる」、「あまりあてはまらない」、「あてはまらない」の５件法で尋ねた。なお、20項目中2項目（「授業はなるべく休まず受けたほうが良いと思う」、「同じクラスの人たちは保育者になる目標を共有した仲間である」）は逆転項目として設定した。

(3). 保育者効力感尺度

UPI - GRSV および JCLM との関連を探るため、三木・桜井(1998)の作成した、「保育者効力感尺度」を使用した。本尺度は、保育者志望学生の職業意識や保育観のとの関連で、多くの研究で用いられている(中村(2006), 神谷(2009)など)。尺度の信頼性、妥当性共に検証されていることから、本尺度を用いることとした。本尺度は全 15 項目から構成されており、「私は、子どもにわかりやすく指導することができると思う」、「保育プログラムが急に変更された場合でも、私はそれにうまく対処できると思う」、などの項目から構成されている。15 項目中 4 項目が逆転項目(例えば「私が、やる気のない子どもにやる気を起こさせることは、難しいと思う」等)である。回答者に「あなたが保育者(保育士または幼稚園教諭)になった時」を想定させ、それぞれの項目がどの程度あてはまるかを、「非常にそう思う」、「ややそう思う」、「どちらともいえない」、「あまりそうとは思わない」、「ほとんどそうとは思わない」の 5 件法で尋ねた。

(4). 悩みの有無と相談希望に関する項目

本研究は学生のメンタルヘルスの問題を取り扱うため、倫理的配慮として援助要請を行った学生を確実に相談につなげる必要がある。本項目では、学生に短大生活や進路、自分自身のことなどについて、悩みが「ある」か「ない」かに回答を求めた。さらに、悩みが「ある」と回答した学生に対しては、相談の希望の有無を、「相談したい」「今はまだ相談しなくてもよい」「相談しなくてもよい」の中から選択するよう求めた。

倫理的配慮

本調査の内容と実施に関しては、保育科学科長に事前に調査内容を口頭及び紙面で伝え、調査の許諾を得た。調査は過去のデータの照合のため記名式で行った。学生に対してはデータの分析は統計的に処理されるため個人が特定されることはないことを口頭で説明した。更に個人情報保護に配慮し、データの入力および閲覧、保管は著者の責任で全て行った。また、UPI-GRSV 高得点者や相談を希望する学生に関しては、後日臨床心理士の資格を有する著者が個別に面談を行い、フォローアップを行った。

方法

結果の分析は、すべて IBM SPSS Statistics (Version23)を使用した。

(1) 回答者数および回収率

回答者数は、1年生 61 名、2年生 67 名、計 128 名であり、欠損値は見られなかったため全てのデータを分析対象とした。回収率は、平成 28 年度 9 月末時点の在籍学生数(136 名)の 94. 11%であった。

(2) UPI - GRSV および短大生活不適應感尺度、保育者効力感尺度の学年ごとの比較

Table 1 に各尺度の記述統計量および相関係数を示す。UPI - GRSV および短大生活不適應感尺度に関しては、合計得点の平均値を分析に用いた。保育者効力感尺度に関しては、各得点の平均値を分析に用いた。なお、短大生活不適應感尺度および保育者効力感尺度に関しては、逆転項目が含まれていたため、逆転項目得点の処理を行った上で分析した。1 年生と 2 年生の各尺度得点に対し、 t 検定を行った結果、UPI - GRSV 合計得点および短大生活不適應感尺度に関しては差は認められなかった(それぞれ $t(126) = .10, n.s.$, $t(126) = 1.57, n.s.$)。いっぽう、保育者効力感尺度平均点に関しては、5%水準で有意であった。 $(t(126) = 2.47, p < .05)$ 。したがって、保育者効力感尺度に関しては、2 年生の方が 1 年生よりも得点が高い傾向にあることが示された。

Table 1 各尺度の記述統計量			
学年	1 年	2 年	
	Mean (SD)	Mean (SD)	t 値
UPI-GRSV 合計点	66.37 (20.81)	65.97 (21.85)	0.1
短大生活不適應感尺度合計点	44.60 (10.95)	41.62 (10.42)	1.57
保育者効力感尺度平均点	3.08 (.47)	3.29 (.51)	-2.47*
度数	61	67	

*. $P < .05$

次に学年別の UPI - GRSV および短大生活不適應感尺度、保育者効力感尺度に関して Pearson の相関係数を求めた。**Table2**、**Table 3** に学年別の各尺度の相関係数を示す。1 年生では、UPI - GRSV 合計点と短大生活不適應感尺度合計点の間に有意な正の相関が見られた ($r = .46, p < .01$)。また UPI - GRSV 合計点と保育者効力感尺度平均点の間に有意な負の相関が見られた ($r = -.36, p < .01$)。さらに、短大生活不適應感尺度合計点と保育者効力感尺度

Table2 各尺度間の相関係数（1 年生）(N=61)

	UPI-GR Short Version 合計点	短大生活不適應感尺度 合計点	保育者効力感 尺度平均点
UPI-GRSV 合計点		.46**	-.36**
短大生活不適應感 尺度合計点			-.51**

**, $P < .01$

平均点の間に有意な負の相関が見られた($r = -.51, p < .01$)。2 年生では、UPI - GRSV 合計点と短大生活不適應感尺度合計点の間に有意な正の相関が見られた($r = .51, p < .01$)。また、短大生活不適應感尺度合計点と保育者効力感尺度平均点の間に有意な負の相関が見られた($r = -.53, p < .01$)。さらに UPI - GRSV 合計点と保育者効力感尺度平均点の間に弱い負

Table3 各尺度間の相関係数（2 年生）(N=67)

	UPI-GR Short Version 合計点	短大生活不適應感尺度 合計点	保育者効力感 尺度平均点
UPI-GR Short Version 合計点		.51**	-.22
短大生活不適應感 尺度合計点			-.53**

**, $P < .01$

の相関が見られた($r = -.22, p < .10$)。これらのことから、両学年で UPI - GRSV 合計点が高くなるほど短大生活不適應感尺度合計点が高くなる傾向にあることが示された。また、同じく両学年で短大生活不適應感尺度合計点が高くなるほど、保育者効力感尺度平均点が低くなる傾向が示された。そして 1 年生において、UPI - GRSV 合計点が高くなるほど、保育者効力感尺度平均点が低くなる傾向が示された。

（3）短大生活不適應感尺度の信頼性の検討

今回作成した、短大生活不適應感尺度の信頼性を検討する目的で、全 20 項目の尺度に関して因子分析を行った（主因子法、プロマックス回転）。因子負荷量が全て 0.35 以下の 5 項目を削除し（質問 4「授業を受けても保育をする上で役に立たないと思う」、質問 5「授業をまじめに受けようという意欲がわからない」、質問 6「授業はなるべく休まず受けたほうがいいと思う」（逆転項目）、質問 10「同じクラスの人は保育者になる目標を共有した仲間である」（逆転項目）、質問 11「クラスの中でも仲のよい友人以外には関心がない」）再度因子分析を行った（主因子法、プロマックス回転）。固有値が 1 以上の因子を採択した結果、4 因子構造となった。Table 4 に、短大生活不適應感尺度の因子分析表を記載した。第 1 因子は、「実習(教

育実習および保育実習)に行くのが嫌だ」、「自分は保育者(幼稚園教諭・保育者など)には向いていないと思う」など 6 項目から構成されており、保育職への進路選択に関する意欲の低下が共通する要因と考えられたため、『**保育者志望意欲低下**』因子と名付けた。第Ⅱ因子は、「学校をやめたい」、「学校を卒業まで続けられる気がしない」など 3 項目から構成されており、学校生活そのものへの意欲の低下が共通する要因と考えられ、『**学修継続意思低下**』因子と名付けた。第Ⅲ因子は、「クラスの中で誰と一緒にいてよいか分からない」、「私はクラスの中で浮いている気がする」など 3 項目から構成されており、所属クラスへの帰属意識の低下が共通する要因と考えられたため、『**集団所属意識低下**』因子と名付けた。第Ⅳ因子は、「授業の内容が難しく、理解できないことが多い」、「楽しいと感じられない授業が多い」など、授業への理解度や参加意欲に関わる要因が共通して認められたため、『**授業課題達成困難度**』因子と名付けた。各因子に関して、Cronbach の α 係数を算出したところ、それぞれ『**保育者志望意欲低下**』因子； $\alpha = .83$ 、『**学修継続意思低下**』因子； $\alpha = .79$ 、『**集団所属意識低下**』因子； $\alpha = .78$ 、『**授業課題達成困難度**』因子； $\alpha = .70$ であった。

(4) UPI - GRSV 高群/低群における短大生活不適応感尺度各因子得点の比較

短大生活不適応感尺度の各因子の因子得点を平均値によって算出した。そして全データを UPI - GRSV の合計点で 50%に分割し、UPI - GRSV 高群/低群と名付けた。Table5 に UPI - GRSV 高群/低群における短大生活不適応感尺度の各因子の因子得点平均値の記述統計量を記載した。UPI - GRSV 高群/低群における短大生活不適応感尺度の各因子の因子得点平均値に関して、 t 検定を行った。その結果、保育者志望意欲低下因子、集団帰属意識低下因子、授業課題達成困難度因子において、1%水準で有意な差が認められた(保育者志望意欲低下因子； $t(126)=3.57$ 、集団帰属意識低下因子； $t(126)=4.34$ 、授業課題達成困難度因子； $t(126)=4.17$)。また、学修継続意思低下因子において、5%水準で有意な差が認められた。したがって、短大生活不適応感尺度の 4 因子全てにおいて、UPI-GRSV 高群が低群に比べ得点が高い傾向にあることが示された。

Table4 短大生活不適応感尺度 (JCLM) の因子分析表

(プロマックス回転後の因子パターン)

	I	II	III	IV
15. 実習(教育実習および保育実習)に行くのが嫌だ	.87	— .00	— .06	— .02
16. 実習先はなるべく楽なところを選びたい	.76	— .23	.44	.22
13. 将来保育者になる気はない	.61	.25	.08	— .26
12. 自分は保育者(幼稚園教諭・保育士など)には向いていないと思う	.52	.24	.07	— .04
20. 本学ではなく、他の学校に行けばよかったと思うことがよくある	.50	.10	— .49	.11
17. 学校に行きたくないことがある	.37	.06	— .47	.28
19. 学校をやめたい	.09	.79	— .06	.01
18. 学校を卒業まで続けられる気がしない	.00	.72	.00	.07
14. 資格(幼稚園免許または保育士資格)が取れなくても仕方ないと思う	.01	.50	.09	.18
9. クラスの中で誰と一緒にいていいかわからない	— .19	.00	.95	.06
7. 私はクラスの中で浮いている気がする	.07	.04	.65	— .07
8. クラスの中に心を許せる友達はいない	.27	— .06	.59	— .00
1. 授業の内容が難しく、理解できないことが多い	— .11	.23	— .01	.69
2. 提出課題が多く、時間が足りない気がする	— .00	.01	.00	.59
3. 楽しいと感じられない授業が多い	.28	— .04	.01	.54
因子間相関	I	.53	.31	.57
	II		.17	.51
	III			.26

Table 5 UPI-GRSV 高群/低群における
短大生活不適応感尺度因子得点の記述統計量

	UPI-GRSV		<i>t</i> 値
	低群 (N=64)	高群 (N=64)	
短大生活不適応感尺度	<i>Mean (SD)</i>	<i>Mean (SD)</i>	
保育者志望意欲 低下因子	2.12(.73)	2.16(.80)	−3.57**
学修継続意思低下因子	1.53(.65)	1.85(.90)	−2.31*
集団帰属意識低下因子	1.37(.62)	1.90(.73)	−4.34**
授業課題達成 困難度因子	2.49(.74)	3.04(.73)	−4.17**
		* $p < .05$	** $p < .01$

考察

(1) UPI-GRSV と短大生活不適応感尺度および保育者効力感との関連について

結果(1)より、1年生、2年生ともに)UPI-GRSV と短大生活不適応感尺度との間には有意な正の相関が認められた。また、結果(5)より)UPI-GRSV 高群の学生は短大生活不適応感尺度のすべての因子得点が低群に比べて高い傾向が示された。したがって、UPI-GRSVにおいて高得点の学生に関しては、保育者養成課程における短大生活にも不適応感を強く感じている可能性がある。橋本・垂見(2015)によれば、UPI の得点は入学時から大きな変動は見られず、入学時 UPI スコアがハイスコアであった学生は、卒業時までメンタルヘルスの危機状態は変わらなかったことが示されている。本研究においても、UPI-GRSV がハイスコアの学生に関しては、短大生活を通じてメンタルヘルスの危機に瀕しており、短大生活不適応感尺度で捉えられるような、学校生活への意欲低下や保育職への職業選択に対する迷いや自信喪失経験が積み重なった際に、よりメンタルヘルスの状態が悪化し、中途退学等の危機が高まる恐れがあると考えて、予防的支援を行っていく必要があるであろう。

いっぽう、UPI-GRSV および短大生活不適応感尺度と保育者効力感との関連では、特に短大生活不適応感尺度と保育者効力感の間には各学年ともに中程度の負の相関が認められた。すなわち短大生活への不適応感が低くなるほど保育者効力感は高くなる傾向が認められるということになる。このことから、学生の保育者効力感を高めることができるような授業構成、クラス集団の連帯感や凝集性を高めるような教育的働きかけ、実習体験を積極的な学生

の学びの場にするためのフォローアップ体制などを、教員側が日々の短大生活の中で地道に行っていくことが、学生の不適応感の克服に寄与する可能性を示唆している。

(2) 各学年の保育者効力感得点の比較に関して

結果(2)において、保育者効力感得点の平均値を1年生と2年生で比較したところ、1年生に比べ2年生の方が保育者効力感が高い傾向が示された。調査時点で2年生は最後の外部実習を目前にしていたこと、1年生は10月から始まる幼稚園実習前であったことなどを考慮すれば、2年生は実習経験を積む中で保育者効力感を培ってきたのに対し、1年生は現場での経験がないが故、保育者効力感は低くなった可能性もある。しかし本研究は縦断研究ではない為、他の研究(例えば三木・桜井(1998)、石川(2003)等)のように実習前後や学年の継時的変化によって保育者効力感が変動したものとはみなされない。今後継続したデータ収集によって、1年生の保育者効力感の変化を縦断的に把握していくことも必要であろう。

(3) 保育者養成短期大学不適応感尺度の分析に関して

結果(3)において、短大生活不適応感尺度の因子分析の結果、4因子が抽出された。本尺度は本学学生の学校生活への不適応感を測定する目的で開発された。各因子得点の α 係数は.70~.83と、比較的高い値を示しており、本尺度が今後も活用可能であることが示された。因子の中では、特に『学修意思低下』因子の得点が臨床上学生の学校適応の一定の判断基準となると思われる。『学修意思低下』因子の中には、「学校をやめたい」「学校を卒業まで続けられる気がしない」等、当該学生の回答時の適応困難を直接尋ねる質問項目が含まれている。今後、『学修意思低下』因子の高得点者を呼び出し面接の対象とするなどの配慮が必要となってくるであろう。本尺度の持つ利点としては、UPI-GRSVでは得点が低く、「問題なし」と結論付けられた学生の中で、短大生活不適応感尺度の得点が高得点である学生を支援につなげる可能性が高まることが挙げられよう。2015年度において、本学における中途退学者のケースの多くは、UPI得点は「問題なし」とされた学生であった。このことはUPI(UPI-GRSVを含めた)の結果のみで学生の学校不適応を予測し、迅速に対応することは困難であることを示唆している。今後、定期的に(例えば5月、9月末、1月)短大生活不適応感尺度を実施することで、学生の不適応感のスクリーニングの精度を高めることが可能になると考えられる。そして各学生の短大生活不適応感尺度を縦断的に調査することで、学生のメンタルヘルスの維持や改善に寄与するような要因をつきとめることができるかもしれない。しかし、本尺度には課題も存在する。項目数の選定と、学生の短大生活不適応感の実像を把握できるよう質問項目を修正していくことも必要であろう。

今後の課題

第一の課題は、今回作成した『短大生活不適応感尺度』の妥当性の検討である。本尺度が測定しているものは、本学特有の学生の不適応感なのか、それとも保育者養成校の他の短大においても活用可能なものなのかは、サンプル数の少なさから慎重に判断する必要がある。今後、質問項目の修正を重ね、本学だけでなく他の保育者養成校短大にも調査を依頼し、保育者養成校短大生に共通する不適応感を測定する尺度を作成することは臨床上有効であると思われる。

第二の課題は、学生のメンタルヘルスの危機や学校不適応感を把握した後の、組織的対応の整備と明確化である。本学では2016年度より「こころの健康サポート係」を教学委員会の下部組織として立ち上げ、全学的な学生相談・学生支援体制の構築に向けて模索中である。次年度以降、今回使用した尺度も含めた、学生の精神的健康や学校適応度を測定するスクリーニング検査の実施と分析、要配慮学生への呼び出し面接の権限などを「こころの健康サポート係」が担うことで、迅速に要配慮学生を支援につなげることが可能になるものと思われる。学生一人一人が適応的に短大での生活を送り、保育者という希望の進路実現に至ることができるよう、最大限サポートする役割が本学の保育科教員全員に求められている。今回の調査の成果を次年度の学生への支援に着実に活用していきたい。

文献

橋本翼・垂見直樹 2014 保育者志望学生のメンタルヘルスと支援方策の検討—近畿大学九州短期大学保育科1年生の調査から— 近畿大学九州短期大学研究紀要, **44**, 47—61

橋本翼・垂見直樹 2014 保育者志望学生のメンタルヘルスに関する探索的研究—UPI(学生精神健康調査)と自尊感情との関連およびUPIの継時的分析を通して— 近畿大学九州短期大学研究紀要, **45**, 69—82

石川 隆行 2005 保育者を目指す短大生の保育者効力感について —宮女子短期大学研究報告, **42**, 315—322

神谷哲司 2009 保育者養成短期大学生の保育者効力感の縦断的变化—実習時期と就職活動を通じた進路選択過程に着目して— キャリア教育研究, **28**, 9—17

三木知子・桜井茂男 1998 保育専攻短大生の保育者効力感に及ぼす教育実習の影響 教育心理学研究, **46**, 203—211

中村 多見 2006 保育学生の保育観（1）—保育者効力感の発達— 高松大学紀要, **45**, 197-206

小田真二 2015 学生相談に関する近年の研究動向 学生相談研究, **36(2)**, 147-162

酒井 渉 (2015) 5 件法版 University Personality Inventory の検証—主として項目反応理論を用いて— 学生相談研究, **35(3)**, 218-229

吉村 真理子 1998 学生相談室における UPI 活用の検討 千葉敬愛短期大学紀要, **27**, 33-42

〈付記〉

本調査に快く協力していただいた保育科学生の皆様に心より感謝します。

資料 短大生活不適應感尺度

以下の質問はあなたの短期大学の生活についてお聞きするものです。各質問をよく読んで、
あてはまる 数字に○をしてください。

	まったくあてはまらない	あまりあてはまらない	あてはまる	かなりあてはまる	とてもよくあてはまる
① 授業の内容が難しく、理解できないことが多い	1	2	3	4	5
② 提出課題やレポートが多く、時間が足りない気がする	1	2	3	4	5
③ 楽しいと感じられない授業が多い	1	2	3	4	5
④ 授業を受けても保育をする上で役に立たないと思う	1	2	3	4	5
⑤ 授業をまじめに受けようという意欲がわからない	1	2	3	4	5
⑥ 授業はなるべく休まず受けたほうが良いと思う	1	2	3	4	5
⑦ 私はクラスの中で浮いている気がする	1	2	3	4	5
⑧ クラスの中に心を許せる友達はいない	1	2	3	4	5
⑨ クラスの中で誰と一緒にいてよいか分からない	1	2	3	4	5
⑩ 同じクラスの人達は保育者になる目標を共有した仲間である	1	2	3	4	5
⑪ クラスの中でも仲の良い友人以外には関心がない	1	2	3	4	5
⑫ 自分は保育者(幼稚園教諭・保育士など)には 向いていないと思う	1	2	3	4	5
⑬ 将来保育者になる気はない	1	2	3	4	5
⑭ 資格(幼稚園免許または保育士資格)が 取れなくても仕方ないと思う	1	2	3	4	5
⑮ 実習(教育実習および保育実習)に行くのが嫌だ	1	2	3	4	5
⑯ 実習先はなるべく楽な所を選びたい	1	2	3	4	5
⑰ 学校に行きたくないことがある	1	2	3	4	5
⑱ 学校を卒業まで続けられる気がしない	1	2	3	4	5
⑲ 学校をやめたい	1	2	3	4	5
⑳ 本学ではなく、他の学校に行けば よかったと思うことがよくある	1	2	3	4	5

(注：質問⑥、質問⑩は逆転項目)